

～かけがえのない子どもの成長を見守るために～

「就学前教育研究プロジェクト」発足

就学前の子どもたちの相互理解を図り、次の成長期への豊かなつながりが持てるように、遊びを中心とした生活の中での学びについて調査・考察する「就学前教育研究プロジェクト」が、公募による保育士・幼稚園教諭13名を委員に委嘱し、第1回会合を2月3日に行いました。今後、月1回程度の会合を重ね、保育所・幼稚園、私立・国公立の垣根を越え、京都ならではの就学前教育のあり方について調査・研究し、その成果を発信して参ります。



就学前教育研究プロジェクトメンバー

- 桑田いく子 京都市改進黨保育所
 - 小柴 優人 淀白鳥保育園
 - 関川 直子 あげぼの保育園
 - 谷 晴子 京都市立みつば幼稚園
 - 堂腰きみ子 同志社幼稚園
 - 仲 敬子 泉山幼稚園
 - 中川 貴子 市原野保育園
 - 鍋島 恵美 京都教育大学附属幼稚園
 - 堀河 邦子 共栄保育園
 - 松本 行司 マクリン幼稚園
 - 森田 歩 洛陽保育園
 - 八木 和子 京都市立開智幼稚園
 - 山田 昭子 京都市船岡乳児保育所
- (50音順、敬称略)

開館5周年記念事業「がんばる子育て みんながメダリスト」

朝原宣治・奥野史子夫妻による
五輪カップルさわやかトーク



あさはらの 宣治さん
2002年アジア大会
100m銀メダリスト
アテネオリンピック・
陸上選手団主将



おくの ふみこ
奥野 史子さん
バルセロナオリンピック・
シントロナイズドスイミング
銅メダリスト
こどもみらい館「基本構想策
定委員会」委員

日時 3月25日(金)午後2時～4時
会場 こどもみらい館4階
定員 250名
参加費 無料

申込方法 往復はがきに住所、氏名、連絡先電話番号を書いて3月10日(消印有効)までに、こどもみらい館へ。はがきは一人1通(申込み多数の場合は抽選)。保育希望の方は子どもの年齢も、手話通訳、親子モニター室(乳児も同伴可)希望の場合はその旨明記。

同時開催 「子育てわくわく安心のまち京都」創出に向けた
論文・提言の表彰式
京都市長賞、こどもみらい館館長賞、佳作を表彰

研究冊子等の提供のお願い
こどもみらい館では、各園・所で取り組んでおられる研究などをまとめられた冊子や紀要を収集・保管し、今後の研究・研修など共同機構の取組の参考にさせていただきたいと考えています。ぜひご提供いただきますようお願いいたします。

共同機構研修会のビデオを貸し出しています

園(所)内研修にご活用ください。お申込はこどもみらい館事務室まで。

- 第1回 汐見 稔幸氏「専門職に求められる、ともに育てる保育とは」(5月17日実施分)
- 第2回 藤森 平司氏「これからの保育園・幼稚園～21世紀型保育のススめ～」(6月11日実施分)
- 第3回 帆足 英一氏「愛されている実感をいかに子どもに伝えるか 豊かな育ちに向けて」(9月11日実施分)
- 第4回 西川由紀子氏「子どもの思いにこころをよせて 保護者とともに、子どもの育ちを見守る」(10月29日実施分)



【編集後記】

小雪舞う日の出勤途中でちらほらほころびた梅の花をみつけました。私の顔も思わずほころびて...今年度種をまかれた「保幼小中連携」や「就学前教育研究プロジェクト」のとりくみも、時を得てきっと美しい花をさかしてくれることだろうと期待し、大切に育てていかなければと、ほのかな梅の香に思いをよせたひとときでした。今後ともどうぞご支援よろしくお祈りいたします。

研究・研修部会委員 山本 衣子(洛陽保育園主任)

発行日 平成17年3月1日
発行者 京都市子育て支援総合センター
こどもみらい館
〒604-0883 中京区間之町通竹屋町下る
Tel (075)254-5001
Fax (075)212-9909
Eメール jigyo@kodomomirai.or.jp
URL http://www.kodomomirai.or.jp

京都市子育て支援総合センター
こどもみらい館
研究・研修だより

かがやき Vol.3



保育所(園)・幼稚園、小学校、中学校が相互の実態や連携、援助観等を共に学び合いました



名倉啓太郎教授からの基調提言

地域の中でのつながりの重要性を確認した 保幼小中連携シンポジウム

「見て聞いて知って 育ちの道すじ考えよう」を開催

子どもをめぐる社会環境の著しい変化の中で、生涯にわたる人間形成の基礎であり、生涯学習の基盤となる保育所(園)・幼稚園と小学校、中学校が互いに連携し、相互理解を深め、次世代を育む環境づくりを共に考えていこうと、昨年12月17日、保幼小中連携シンポジウム「見て聞いて知って、育ちの道すじ考えよう」を開催しました。

これは、こどもみらい館の共同機構特別研修会と京都市教育委員会の保幼小中連携推進事業との共同によるもので、保育所(園)、幼稚園、小学校、中学校等の関係者が一堂に会した意義深いシンポジウムとなりました。

最初に、名倉啓太郎仁愛大学教授(こどもみらい館企画・運営委員会座長)から、京都特有の地域性、文化性に根ざした幼児期からの学びと育ちについて

基調提言をいただき、引き続き行われたシンポジウムでは、次代を担うかけがえのない子どもたちの成長を、幼児期から一貫して見守ることを願った実りある意見交換がなされ、さらなる連携の大切さを確認した研修会となりました。

こどもみらい館では、このシンポジウムの機運を引き継ぎ、保幼と学校との連携、地域の教育力・子育て支援力の向上に向けた活発な研究・研修を進めてまいります。

- | | |
|----------|--------------------------|
| シンポジスト | 苗村 隆昭 知真保育園園長 |
| | 新井 道子 楽只保育所所長 |
| | 岸 省子 今宮幼稚園園長 |
| | 石川千加代 伏見板橋幼稚園園長 |
| | 井丸 勝子 伏見板橋小学校校長 |
| | 加藤 博昭 西院中学校校長 |
| コーディネーター | 中森 美幸 教育委員会
指導部首席指導主事 |

子どもの思いに こころをよせて

保護者とともに、 子どもの育ちを見守る

講師・西川由紀子氏
華頂短期大学助教授



プロフィール / 華頂短期大学社会福祉学科児童福祉専攻助教授。専門は発達心理学・保育学。保育園をフィールドとして、言語発達を中心に子どもの発達を研究。自治体の乳幼児健診や発達相談などで相談員としても活躍中。主な著書に、「子どもの思いにこころをよせて 0, 1, 2歳児の発達」「『かみつき』をなくすために保育をどう見直すか」(かもがわ出版)ほか多数。

子どもの発達 人と関わる力を中心に

乳児期前半...赤ちゃんは、おとなを求めている

生まれたばかりの赤ちゃんは、できないことだらけと思いがちですが、とても能動的な存在です。赤ちゃんがおっぱいを飲む時、途中で休憩することがあります。赤ちゃんが飲むのを止めると、母親は「どうしたの?」と顔を合わせ、もう少し飲んでほしいと願って働きかけをしましょう。赤ちゃんは、こうした働きかけを誘発し、おとなが自分に望んでいることを確かめるために、わざと休憩するのだといわれています。

赤ちゃんは、授乳を通して、栄養的に満足するだけでなく、人間的な対応も求めているのです。

乳児期後半...特定の親しい人をつくる

はいはいができ、物をつかめるようになると、そのことを安全にこなすための判断が必要となります。しかし、自分でその判断ができない赤ちゃんは、自分を一番安全に守ってくれる「特定の親しい人」を、その判断をしてくれる人として選ぶのです。赤ちゃんが見知らぬ人や物事に出会った時、母親の表情を読み取ってから自分の行動を決めるのは、お母さんを「特定の親しい人」で判断してくれる人と思っているからです。「特定の親しい人」は、お母さん以外にも、家族や保育園の担任などが該当します。その人を基準に判断することで、危険から身を守っているのです。

だから、この時期に「この人が大好き」という気持ちを育み、「特定の親しい人」をつくっておくことが必要なのです。「人見知り」が表れるのは、「特定の親しい人」の認識ができ、

その他の人と区別して捉える力ができたことを示します。

1歳児...コミュニケーションの主体になる

この時期になると、「～したい」「いや」など意思表示ができるようになり、コミュニケーションの主体になる能力が育ってきます。その基盤ができるには、まず、自分の気持ちを伝えたい「親しい人」が身近にいて、「伝えたい中味」がある生活を送っていることです。「伝えたい中味」とは、日常生活の中で、いつもと違うわくわく感を味わう経験であり、その時々を感激をおとなと共感し、そのおとなが「おもしろかったね」「びっくりしたね」などと言葉で返すことによって、子どもは自分の思いが伝わる喜びを感じ、コミュニケーションすることの楽しさを実感するのです。

また、コミュニケーションの主体となる能力は、「だだこね」にもつながります。「だだこね」は、自分の思いが聞き入れられるかどうか、そこにいる相手に期待している行動で、その中には、自分の思いをぶつけ、相手とつながろうとする力があるのです。ただし、子どもの要求をそのまま通すことだけでは望ましくありません。子どもの思いを「～したいんだね」と一旦受け止めてから、おとな側の事情を子どもに伝えることが大切です。

2歳児...自分が一番の時代

自分の思いをたくさんもち、その思いを相手に伝えることができた子どもは、自我が充実していきます。この時期は、人から褒められることが無条件でうれしく、「自分が一番」という有能感や自信を持ちます。自他の区別はできていますが、他者と比較しないこの時期に、子どものいいところ

をしっかり褒め、気持ちの根っこ部分に「自分のことが大好き」という気持ちを育ておくことがとても大切です。

3歳児...「すてきな自分」になりたい

3歳児の自我の育ちを見る試みとして、3枚の皿(自分とその他の親しい2人の分)にキャンディーを配分するように話すと、子どもは自分の皿への配分を最大にしました。そして、さらにもう一人の皿を加えると、自分の皿のキャンディーを取り出し、そこへ配分したのです。このことから、自分を最大にする自我は、人を蹴落とす自我でなく、人に優しくできる自我と一体であることがわかります。自分が大好きで自分のことを大切に思う気持ちがあつてこそ、人も大切にできる心が育つのです。

3歳児は、こうした思いやりの姿をもち、常に「すてきな自分」になりたいと願っているのです。しかし、失敗をして一旦気持ちが崩れると、果てしなく崩れ、1歳児のようになるのも3歳児の姿です。わかっているけれど、いつもすてきていることは難しいのです。

4歳児...がんばるけれど、くじけもする

この時期は、先の見通しをもてるようになり、そのため、自分の中でがんばる力が生まれてくる時期です。ただし、「やってみよう」と思うプラスの見通しだけではなく、「失敗するかもしれない」と思うマイナスの見通しもつのです。見通しをどのように立てるかは、それまでの経験が関連してきます。失敗したことで恥ずかしい思いを重ねたり、一番いいところを褒められなかったりすると、自分で自分の可能性を縮めてしまうようなことが、この頃には出てくるのです。自己評価がだんだん正確になってくる時期なので、おとなは、子どものがんばりを正確に評価し、注意深く的確に褒めなければならないのです。

5歳児...計画を立てて行動する

この時期は、過去の経験を生かしながら、見通しをもち、計画を立てて行動できるようになります。基本的な身辺自立の能力を獲得し、ある程度、生活に必要なことがこなせます。ただ、その力がコンスタントに発揮できるのではないのです。最大限がんばったらその力は発揮できますが、気を抜いてもいい時にはだらだらしたり、甘えられる時には甘えたりします。安定してしっかりした力を発揮するのは就学後の課題だと思います。

2歳頃の「自分が一番」という自信をばねに、3, 4, 5歳と良いところを周囲のおとなからしっか

り評価されて、自分にはすてきな力があるという自信を幼い時にもつことが大切なのです。

保護者とともに

保護者と一緒に子どもを育てていくことが難しくなってきました。例えば「かみつき」の問題が起こった時、子どもの問題だけでなく、時には保護者同士のトラブルを生み出すことがあります。かみつきが起こってしまったら、まずはその状況をつくった園の責任として引き受け、保育を見直す必要があります。おとなの目を引く行動の中には、その子なりの理由があり、発達したい願いがあると捉え、その子どもが、どんな発達要求を伝えようとしているのかを、保護者とともに受け止めていくことが大切です。

保育者は、普段から子どもを介して保護者とながりをもち、トラブルが起こる以前に、プラスの人間関係を築いておくことが必要です。

保護者同士の関係も同様です。バザーや夏祭りなど保護者活動の取組は、保護者同士が互いの人間性を知り、良い関係をつくる機会でもあります。保護者同士のつながりを築くことができれば、その後にトラブルがあったとしても、互いが敵対するのではなく、一緒に悩みを考え、支え合う仲間になることもできます。日頃から、自分の子どもだけでなく、クラスの子どもの成長をみんなで見守り、喜び合える視点をもった保護者集団をつくっておくことが大切です。

子どもは人と人を結びつける親善大使です。子どもを介して保育者と保護者、保護者同士、保育者同士のあたたかい関係を築くことが、子どもにとって一番幸せなことなのです。

【平成16年10月29日】



新しい時代に求められる 保育者の専門性とは



講師・小田 豊氏
国立教育政策研究所次長

プロフィール/滋賀大学教育学部教授、文部省初等中等教育局幼稚園課教科調査官、文部科学省初等中等教育局主任視学官などを歴任。主な著書に、「新しい時代を拓く幼児教育学入門」(東洋館出版)、「家族援助論」(光生館)ほか多数。

専門家であること

以前、アキレス腱を切った時のことです。脳外科の権威である著名な医師に見てもらったのですが、足のけがは十分にはわからないとのことでした。そして、彼から紹介された町の整形外科の医師は、ひと目で症状を見極め、すぐに手術という見立てをしました。医師というと、身体のことなら何でもわかると思いがちですが、それぞれに専門分野があるのです。

それと同様に、教師・保育者もひとくくりではなく、幼児期に携わる保育者は幼児期の専門家でなければなりません。「専門は何か」と聞かれて、遊び、生活、こころなどと抽象的に答えるだけでは不十分です。幼児期の「学び」をしっかり捉えたいと、小学校低学年の学びとの共通性も理解すべきです。

最近、少年による殺傷事件などが発端となり、子どもたちの変化について語られることが多くなっていますが、ある加害児童について、その子どもの小学校や中学校の先生が異常に気づけなかったと答えたのに対して、幼稚園の時の担任は幼児期に異常性があったと指摘しました。私はそれを聞いて、子どもが初めての集団生活で出会う先生の目が厳しすぎるのではないかと感じました。保育者は、子どもの欠点を探すのではなく、良さを探す専門家であるべきです。

子どもも親も追い込まれている

最近の日本の子どもたちについて、「学力が低下している」

とOECD(経済協力開発機構)で指摘されたり、おむつをしている3歳児が約30年前より増えたことなどから「社会力が育っていない」と言われたりしています。

親たちは、少ない子どもをうまく育てなければ悪のように言われ、子育てを専門家に任せたいとよく言われます。おむつは布がよいとか紙がよいとか、ほめる教育とか叱る教育とか、何が本当かもわかりにくくなっています。

今の子どもも親も、レッテルを貼られ、プレッシャーを受け、追い込まれているのです。そんな状況であるがゆえに、保護者の対応が難しくなっているということを十分に踏まえて対応する必要があります。

子どもの知的能力の高さ

脳科学によると、約30年前と比べ、子どもの脳の動き、前頭葉の動きが良くなっていることがわかってきました。便利な生活によって、日常生活での鈍さはありますが、子どもの知的な能力は高くなっているのです。

本日ご覧いただいたビデオ「年長さんがつくったおばけやしき(生活発表会に向けて)」で、年長児が考え、友達とぶつかり合い、保育者の適切な援助を受けながら、おばけ屋敷を作り上げていく様子を見ても、5歳児の能力の高さがわかると思います。

遊びの中の意図的な学び

幼児教育の中で、3歳、4歳、5歳とカリキュラムを積み上げて、子どもの学ぶ意欲を育てているでしょうか。「遊

びを通しての学び」という言葉で安心して子どもに任せていませんか。内発的な好奇心、疑問、感動などの「学びの芽生え」が学習や教科にもつながるように、一人ひとりの発達に合わせて子どもの能力を耕すべきです。子ども同士の中でがまんしたり、自立・持続したり、子どもたちを鍛えることも大事でしょう。

ご紹介したビデオでは、先生は子どもたちを温かく見守りながら、もっと力を発揮できそうな子どもには自分で解決できるように接したり、意見が別れた時にはすぐジャンケンで決めるのではなく、子ども同士で納得するまで話し合いをさせたりしています。

子どもに任せるだけではなく、遊びの中に「保育者の意図による学び」が必要なのです。きちっとしたプログラムの中で、一斉指導ではなく、子ども一人ひとりの良さを生かしながら、その時期に行うべき単元活動を位置づけて、プロジェクトとしていきます。そのためには、保育者は十分に教材研究を行うべきです。

学びとは、単なる遊びや生活ではなく、文字や数字などの学習のことを言っているのでもありません。学びは、知的なインテリジェンスであり、「生きる力」につながるものです。

今後の幼児教育

現在検討されている「総合施設」については、保育所と幼稚園の施設を一元化するものではなく、保育所と幼稚園の両方の良さを生かして内容の一元化を図るべきものです。私たちは、幼児期の専門性を追求したうえで、小学校や中学校と連携していくべきです。

今後、ますます高い保育者の専門性が求められていきます。保育者は力量を高め、徹底して一人ひとりを大切にする保育をしていってほしいと思います。

【平成16年11月20日】



*参考

「年長さんがつくったおばけやしき(生活発表会に向けて)」

(社会教育ビデオ 文部科学省特別選定)

主な内容

- ・毎年秋の終わり、この幼稚園では2週間かけて「遊園地ごっこ」が行われる。年長さんがグループごとにおばけ屋敷などを作り、小さい組さんを招待する。おばけ屋敷グループには、2つの組から6名の子どもたちが集まった。
- ・おばけ屋敷の段ボールの通路の色塗りで意見が分かれ、相談の結果、決まった色は、候補になかった「黒」で、「みんなで我慢して黒にした」と言う。
- ・おばけ作りの場面では、段ボールで簡単にお面を作った子どもに、教師は「ぜんぜん怖くない」と言う。そこで、その子どもは箱から顔が飛び出すおばけを作ろうとひらめく。教師に手伝ってもらいながら、できあがったおばけに満足そうな子どもであった。
- ・みんなでおばけ屋敷の名前を決める時、案は3つ出て、長時間かけて話し合った結果、名前は「年長さんがつくったおばけやしき」となった。
- ・遊園地ごっこの当日、子どもたちは生き生きとした表情で楽しんだ。

気になる子どもの 理解と援助



講師・丸山美和子 氏

佛敎大学社会学部社会福祉学科助教授

プロフィール / 東大阪市教育研究所研究主事として、発達相談・研究に従事した後、1998年より佛敎大学に勤務。主な著書に、「LD・ADHD、気になる子どもの理解と援助」「子どもの発達と子育て・子育て支援」（かもがわ出版）、「発達のみちすじと保育の課題」（あいゆうびい・萌文社）ほか多数。

はじめに

今、保育現場で、理解の難しい子、気になる子について保護者とどう連携するのかという実践上の課題があります。特に、キレル子、荒れる子について「軽度発達障害」「内言未発達」「基本的安全感の欠如」「生活リズムの乱れ」の4つの視点から考えたいと思います。

「軽度発達障害」について

アスペルガー症候群が疑われる場合

自閉症は、社会性の障害、コミュニケーション機能の障害、こだわり・同一性保持という特徴を持っています。発語がない子からよくしゃべる子、発達の遅れが大きい子からまったくない子まで幅が広いです。この中で、知的発達の遅れがない場合を高機能自閉症といいます。アスペルガー症候群は、自閉症の一つのタイプで、知的・言語発達にも遅れがなく、難しい言葉も使いこなせます。しかし、コミュニケーション機能には障害があります。相手の気持ちを理解することが苦手です。

ADHD（注意欠陥・多動性障害）が疑われる場合

注意散漫・多動・衝動的・「キレやすい」特徴を持っています。一般的には、ある刺激に対して興奮過程が興奮し、それ以外の刺激に対しては反応しないように抑制過程が興奮することで、一つの刺激に集中できます。ところがADHDの子は興奮過程が興奮しても抑制過程の興奮が悪く、全部の刺激に次々と反応してしまう転導性があります。

当面の配慮と長い見通しのもとで脳の機能を育て、症状

を軽減・克服していく取組を統一して捉えることが大事です。具体的には、大好きな人と楽しく体を使った活動を十分にすること、生活リズムを整え、規則正しい生活ができるように配慮することなどが重要です。

LDなどの発達のアンバランスが疑われる場合

LD（学習障害）は、全般的な知的発達には遅れはありませんが、「聞く、話す、読む、書く、計算するまたは推論する能力」のどれかに落ち込みがあります。その原因は、中枢神経系の機能障害によると推定されます。ADHDをあわせもっていることが多く、行動がキレやすい場合もあります。また多くの場合、手先や全身運動に不器用さも見られます。絵を描くことが苦手であったり、手と足の協応運動にぎこちなさがあったり、正中線交差につまづきがあったりします。子どもによって落ち込んでいる能力は異なります。一人ひとりの発達特徴を理解し、アンバランスを配慮した適切な対応が求められます。

「内言未発達」について

「内言」が未発達な場合もキレやすくなるのが考えられます。子どもの言語は、外言から内言へと発達していきます。幼児は外言で思考しています。頭の中で考える力（内言）が未発達なので、何でも口に出してしゃべりながら考えます。4歳児は典型的です。一人で遊んでいるときにも、ことばをつぶやきながら遊んでいます。考えていることを、遊びに広げていきます。言語には、コミュニケーションの手段、思考・認識の手段、行動をコントロールする手段としての機能があります。年長になると内

言でものを考えられるようになり、言語で行動をコントロールすることもできるようになります。逆に、内言が未発達な場合は、言語で行動を抑制することができず、キレやすくなります。子どもに「内言」を育てるためには、考えてから話をする機会を保障しなければなりません。一度「内言」をくぐった「外言」活動です。子どもがうまく表現できない場合には、「何を言いたいのか、何を表現したいのか」をおとなが理解し、きちんとした表現に整理してフィードバックすることも必要です。「内言」が育つ中で、少しずつキレルという症状が落ち着いたり、行動を言語でコントロールできるようになっていくと考えられます。

「基本的安全感の欠如」について

「自分は自分であっていい」「自分はかけがない存在なのだ」という自己の存在に対する安心感と自信を「基本的安全感」といいます。今の子どもたちは、少子化の中で育ち、いつも大人の視野で評価にさらされています。「一番であることがいい、できることがいい」という価値観を自分の中に形成し、そうでない自分に価値を見出せていません。「基本的安全感」が弱い場合はキレやすくなります。「あなたはあなたであっていい」「あなたはかけがえない存在」ということをおとなが伝えていかなければなりません。

揺れる子どもに保障したいことは以下のことです。

一つ目は「達成感」です。発達段階に応じた課題への挑戦が大事であり、がんばれば手が届く目標でがんばっていくことが達成感につながります。

二つ目は「基本的安全感」です。「あなたはかけがえない存在なのよ」とおとなが言葉や態度、表情で伝えていくことが重要です。笑顔向けられた子どもは、受け入れられているという安心感を得ることができます。ほめ方や叱り方も重要です。ほめるときは、人格に迫る

ほめ方、叱るときは、行為だけを叱る叱り方を心がけたいものです。

三つ目は「居場所」の保障です。「あんたみたいな子はいらん」とか、「そんなことしたら赤ちゃん組へ行かせよ」というようなことばを口にするのは居場所を奪うことになるので注意が必要です。

「生活リズムの乱れ」について

寝たいときに寝て、起きたいときに起きて、遊びたいときに遊んで、というような生活リズムの乱れは、脳の機能にさまざまな問題を生じさせる可能性があります。生活リズムが乱れているとキレやすくなることも知られています。子どもの発達保障のためには、規則正しい生活が不可欠です。

保育・子育てで大事にしたいこと

子どもの生活基盤を整えることは、難しいけれどとても大事なことです。早寝早起きと十分な睡眠の保障、楽しい食事を規則正しくとること、しっかり体を動かすこと、しっかり手を使うこと、人とのかわり方で声を出し笑う生活等を、子どもに保障すること等が必要です。

保護者自身がこのような生活をしていないため、今一度、子どもと親自身の生活を見つめ直すことが課題かと思えます。

キレル子・荒れる子を理解するとき、軽度発達障害、内言未発達、基本的安全感の欠如、生活リズムの乱れなどに照らし合わせて分析し方針を出すことが大事です。

どんなところがどうして気になるのかについて、「どうして？」と子どもに突きつけるのではなく、「なぜだろう？」と自問自答しながら子どもを理解し、おとなの課題を考える努力が必要です。

【平成16年12月6日】

